

## 令和3年度 横瀬川ダムモニタリング委員会の審議概要について

令和3年度 横瀬川ダムモニタリング委員会を下記のとおり開催しましたので、その審議概要を公表いたします。

### 記

開催日 令和4年2月22日(火)

会 場 WEB 形式

会場 渡川ダム統合管理事務所

### ○目的

横瀬川ダム建設事業及びダム管理による環境への影響検討結果に基づく環境保全措置の具体的手法の実施、モニタリング調査等に関して事業者へ指導・助言を行うことを目的として開催しております。

### ○審議概要

#### (1) 水質

- ◆横瀬川ダムにおける貧酸素化は極めて懸念される問題であるため、引き続き調査をしっかりと実施してほしい。
  - ◆原因を探るためには、濁度、光量子とクロロフィル a (植物プランクトン) の鉛直分布を測定するとよい。
- ⇒来年度から指摘項目も測定し、原因を究明していきたい。

#### (2) 生態系典型性(河川域アユ)

- ◆今回の調査結果から、横瀬川には海から遡上した天然アユが生息するといえる。
  - ◆アユが遡上し、産卵し、海に下ることができる川は健康的な川といえる。
- ⇒来年度も産卵場の調査を実施します。

#### (3) 植物等の重要種

(樹林生重要種)

- ◆樹林生の重要種は概ね保全できたと評価できる。
  - ◆ただし、ラス巻きしたチシャノキが大きくなると今の形では合わなくなるため、新たなシカ対策が必要である。チシャノキの生育地は自然攪乱を受ける場所であり、柵などのメンテナンスも必要という認識の上、今後の対応をしてほしい。
- ⇒必要に応じてメンテナンスを行っていきます。
- ◆シカやウサギの食害が報告されている。シカの対策を検討したほうがよい。シカの確認には、フィールドサイン(足跡や糞)に留意するとよい。

⇒今後の調査の参考とさせていただきます。

(水田風湿地)

◆造成湿地ができて、かつて生息していた水田生、畦畔生の植物が残される機会を得た。今は生育がみられない水田生重要種の埋土種子は長く生き残るため、今後適切な管理を続けると再生する可能性がある。造成湿地は水の確保が難しいとのことであるが、対策を行い、今後も管理を適切に実施して欲しい。

◆宿毛市と話ができて、少なくとも教育に活用できるかたちでの道筋ができたことに感謝する。

⇒宿毛市とともに維持管理していきます。

(湿地池)

◆アセス書の典型性重要種だったトノサマガエルとアカハライモリが確認されたのはよかった。また、造成湿地でコガタノゲンゴロウが確認されたのはよい結果といえる。ただし、同種はパイオニア種であるため、より安定的な環境に生息するクロゲンゴロウやマルタンヤンマなどが確認される環境になるまで注視していかなければならない。

⇒今後の状況確認は、移行する河川水辺の国勢調査での検討課題とする。

(4) 生態系上位性：猛禽類（オオタカを指標）

◆猛禽類の生息実態が把握されており、大変よかった。

◆猛禽類が工事前、工事中、工事後に同じように生息しているのは、環境配慮が為されたことの現れであり、模範的な工事だったと思う。

◆土居ノ内地区で営巣したオオタカの今後の営巣動向（ダムに近づいてくること）に期待している。

◆今後、河川水辺の国勢調査を実施する際には、営巣情報をしっかり引き継いでほしい。

(5) 動物の重要種：ヤイロチョウ

◆ヤイロチョウは、1937年に当地において日本で初めて確認されたメモリアルな鳥であるため、ダム湖の愛称「もみじ湖」の前に「ヤイロチョウの」と入れるとよりアピールできると思う。

◆ダムが自然環境に影響を与えることは間違いないという哲学からスタートせねばならないことを考えると、好印象のみを与えるようなことは避けるべき。

(6) モニタリング調査結果の評価

◆モニタリング調査は、当初環境アセスメントで評価した環境が、ダム建設によりどう変化したかを見るもので、最終的にはそれを評価するものである。

◆資料の内容について事実誤認はなく、大筋として結果を了承する